《論説》

古代西部ユーラシア史の構想

井上文則

はじめに—「地中海世界」を超えて

今回、『フェネストラ』という比較的自由な発表の場を与えられたことを好機として、最近考えている「西部ユーラシア」の古代史におけるローマ帝国の位置・意義について論説とも動向ともエッセイともつかない形で書いてみたい。

日本の歴史学界では、ローマ帝国は、前近代に存在した歴史的な小世界のひとつである「地中海世界」とほぼ等価で捉えられてきた。例えば、戦後の代表的なローマ史家であった弓削達は、ローマの市民共同体の分解と復旧という運動法則が、地中海周辺の諸民族の共同体を巻き込みながら、歴史的な意味での地中海世界を成立させたと見ていた。ローマは、地中海世界を創り出した原動力であり、その結果として成立したローマ帝国は、地中海世界そのものであったのである[1]。

ローマ帝国の理解に際して地中海世界を重視する見方に対しては、南川高志が『海のかなたのローマ帝国』以後、疑義を呈して来ていたが[2]、2021 年に刊行された第 3 期の『岩波講座世界歴史』第 3 巻「ローマ帝国と西アジア　前 3～7 世紀」に寄稿された「展望」「ローマ帝国と西アジアー帝国ローマの盛衰と西アジア大国家の躍動」においても、改めてこの点が主張されている。南川の考えでは、ローマ帝国は、地中海から遠く離れたアルプス以北のヨーロッパまでその支配下に置いており、ローマ帝国＝地中海世界と認識することは、ローマ帝国の実像を見誤ることになる。また弓削の見方は、十分な検証を欠いているため、ローマの影響力を過大評価している可能性があるのである。

このような認識に基づき南川は、「本巻では、ローマ帝国を従来の「古代ギリシア・ローマ文明」として括られてきた捉え方から外して、同時代的な横の地域的つながりを重視し、西アジアの大国家との関係性にも配慮して理解しようと試みる。本巻で扱うローマの歴史は、古代ローマ人の歴史ではあるが、それはイタリアの古代史や古代イタリアの拡大・発展の歴史と同じではない。ローマの「帝国」としての歴史である。首都ローマ市やイタリアを中心に構想されてきた伝統的なローマ史ではなく、世界史的意義を持つ帝国ローマを叙述する試みである[3]」とし、新しいローマ帝国像の模索を提言している。南川の提言は、「古典古代」は言うまでもなく、「地中海世界」の枠組みを取り払い、最終的には、西アジアやアルプス以北のヨーロッパまでを視野に入れて、いわば西部ユーラシアの古代史の中で、どのようなローマ帝国史を描くべきかを問うていると言ってよいだろう。

---

[1] 弓削達『地中海世界とローマ帝国』岩波書店、1977 年、1-66 頁。

[2] 『海のかなたのローマ帝国』岩波書店、2003 年、12 頁。『新・ローマ帝国衰亡史』岩波書店、2013 年、5-6 頁。

[3] 5 頁。

今期の岩波講座では、この第 3 巻のみならず、第 2 巻「古代西アジアとギリシア　～前 1 世紀」、第 8 巻「西アジアとヨーロッパの形成　8～10 世紀」、第 9 巻「ヨーロッパと西アジアの変容　11～15 世紀」でもヨーロッパは、西アジアとの関係の中で位置づけられている。うち本稿の議論と関わる第 8 巻では、ビザンツ史の大月康弘とイスラーム史の清水和裕が「展望」として「ユーラシア西部世界の構成と展開」を書いているが、大月の執筆部分では「本講座での大きな特徴のひとつは、ヨーロッパや西アジアを地域別ではなく、ユーラシア大陸西部のひとつの括りある世界として叙述しようとすることにある[4]」とされ、「地中海世界とメソポタミア世界、そしてイラン高原から中央アジア西部世界を一体の視点で眺める[5]」ことの重要性が指摘されており、ここでは、南川が「試み」としていた「地中海世界」を超えた歴史叙述が既に前提とされている。

このような見方は、P・ブラウンによって提唱された「古代末期」—2 世紀から 8 世紀までの「西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、中東」を一つの歴史的世界と見る史観[6]—に由来するもので、近年の C・ウィッカム『ローマの遺産—400 年から 1000 年までのヨーロッパ史』（2009 年）や P・サリス『信仰の諸帝国—ローマの没落からイスラームの興起まで、500～700 年』（2011 年）といった著作でも取り入れられている[7]。大方のビザンツ史家や初期中世史の専門家の間では、後期ローマ帝国から、北西ヨーロッパのゲルマン民族の諸王国やビザンツ帝国、ササン朝を経て、イスラーム勢力が拡大するまでを視野に入れて歴史を考えることは、もはや自明のこととなっているのであろう[8]。

他方で、古代末期以前の時代については、西部ユーラシア規模の視点は、南川があくまでも「試み」としていたように、まだ自明のものとはなっていない。しかし、ローマ帝国が西部ユーラシア規模の歴史的展開の中に入ったのは、何も古代末期に始まるわけではない。大月が指摘するように、西部ユーラシアの世界は、メソポタミア文明やヘレニズムの時代以後、「緩やかな一体性をもった世界として胎動を続けていた[9]」からである。この小論では、このような研究の現状を踏まえつつ、西部ユーラシア、すなわち地中海周辺からイランに至るまでの地域の歴史におけるローマ帝国の歴史的位置付けについての粗描、まさに文字通り

---

[4] 3 頁。

[5] 3 頁。

[6] P. Brown, *The World of Late Antiquity AD150-750*, New York, 1971. 古代末期史を踏まえた最新の古代西部ユーラシア史の動向については、足立広明「グローバル・ヒストリーとしての古代末期－アイルランドから日本まで—」佐川英治編『多元的中華世界の形成—東アジアの「古代末期」—』臨川書店、2023 年、317-346 頁。

[7] C. Wickham, *The Inheritance of Rome, A History of Europe from 400 to 1000*, London, 2009; P. Sarris, *Empire of Faith, The Fall of Rome to the Rise of Islam,500-700*, Oxford, 2011.

[8] 大月は、地中海世界について「西北ヨーロッパをも含めて総じて「地中海世界」として観察する視座が有効と考えている」とも述べており、南川が批判対象とした伝統的な地中海世界よりも、より広く捉えているが、この点にも、ビザンツ史家とローマ帝国史家の違いが出ている。

[9] 3 頁。

の粗描を試みたい。

西アジア史から見るローマ帝国

ところで、筆者がこのような問題を考えるきっかけになったのは、放送大学のラジオ講座『西アジア史』（24 年放送予定）で、ギリシア・ローマの時代を担当することになり、否応なく西アジアという枠組みの中で、ギリシア・ローマ史を考えざるを得なくなったことである。ここで言う西アジアは、現在のトルコ、シリア、イスラエル、レバノン、ヨルダン、エジプト、イラク、イランの諸国に当たる地域のことであるが、自身の担当部分では、この西アジアとギリシア・ローマとの関係を、前 17 世紀半ばに始まるミケーネ時代から、7 世紀にイスラーム勢力が勃興して、ビザンツ帝国がシリア、エジプトなどの西アジアの領土の多くを失うまでを扱った。

この 2300 年ほどに及ぶ長い時間枠の中で、それも西アジアにおけるギリシア・ローマ史を眺めて改めて、気づかされたことは、前 4 世紀にアレクサンドロス大王が創り出したギリシアからインドに至るヘレニズム世界の領域が、7 世紀のイスラーム帝国の中核地域と一致しているということであった。先に言及した岩波講座 8 巻の「展望」において、清水も「ウマイヤ朝は、エジプト・シリア・イラク・イランをひとつの統治圏としてまとめ上げたという点においてアレクサンドロス帝国の再現[10]」であると指摘する。このことは、ヘレニズム世界が、ひとつの歴史的世界として、前 1 世紀における、いわゆるヘレニズム時代の終焉後も生き続けていたことを示している。

そして仮にこのヘレニズム世界の終焉を古代末期の終わりと同じく、800 年頃に置き、さらにこのヘレニズム世界の一体性を古代末期までの「常態」とした場合、ヘレニズム世界外から興ったローマが、ユーフラテス川に至るまでのヘレニズム世界の西半分を支配していた時代は、ヘレニズム世界の歴史における「異常」、あるいは「例外」の事態ともとらえることができるのではないだろうか。もちろん、ローマがヘレニズム世界の西半分を支配していた時期は、前 1 世紀から 7 世紀まで及ぶのであって、1000 年を超えるヘレニズム世界の歴史のかなりの部分を占めていた。したがって、この時期を「異常」と見るのは、誤りとの指摘もあり得るだろう。しかし、ローマ帝国は、3 世紀には事実上、東西分裂の傾向を示し、東ローマはいわばヘレニズムの後継国家の様相を呈していたことを想起するならば、純然たる外部勢力としてのローマがヘレニズム世界の西半分を支配していた時期は、実質は 300 年に及ばない。このことは、裏を返せば、地中海世界という政治的枠組みが機能していたのは、この 300 年弱の期間であったということにもなる。

伝統的な地中海世界像では、その東の境界は、ローマとパルティア・ササン朝の境界となっていたユーフラテス川に置かれてきた。しかし、ここで主張してきたように地中海世界で

[10] 51 頁。

はなく、ヘレニズム世界の枠組みを歴史的により重視するならば、西部ユーラシアの古代史は、西ローマ地域とそれに対する東ローマ・パルティア・ササン朝の地域という二つの枠組みの中で、描くことが可能となる。なお後者が、言うまでもなく、ヘレニズム世界であり、その西の境界は、概ねバルカン半島中部に引かれる。東西のローマ帝国の政治的な境界は、ダキア管区とイリュリクム管区のそれに当たり[11]、他方で、ラテン語圏とギリシア語圏の境界は、ダキア管区とマケドニア管区・トラキア管区の境辺りに置かれるからである[12]。さしあたっては、ヘレニズム世界の西の境界を厳密には考えないが、ギリシア語圏をもって、ヘレニズム世界と見るほうが適当ではあろう。

続いては、実際に、このような見方に基づきながら古代の西部ユーラシア史を具体的に描いてみよう。

古代西部ユーラシア史粗描

古代の西部ユーラシア史の重要な画期となったのは、前 4 世紀におけるヘレニズム世界の成立である。

アレクサンドロス大王は、前 334 年に始まる東方大遠征によってアケメネス朝ペルシアを滅ぼし、マケドニアからエジプト、インド、アフガニスタンに及ぶ巨大帝国を築き上げた。この帝国は、大王が若くして亡くなったため、短期間で分裂し、マケドニアがアンティゴノス朝、エジプトがプトレマイオス朝、シリア以東がセレウコス朝、やがてはイラク以東がパルティアの支配下に置かれるようになった。しかし、このような政治的分裂にもかかわらず、旧アレクサンドロス大王の帝国は、ギリシア文化圏＝ヘレニズム世界としては、その一体性を保持した。イラン系の遊牧民が建てた国家であったパルティアは、この文化圏からは一見外れるように見えるが、しかしこの国家では貨幣の銘文などを始め、ギリシア語が広く使われ、王は「ギリシア人の友」を称し、宮廷ではギリシア悲劇などが上演されていたのである。

このヘレニズム世界に「異質な」侵入者として現れたのが、イタリア半島の都市国家ローマであった。ローマは、前 3 世紀末の第一次マケドニア戦争以後、本格的にヘレニズム世界に足を踏み入れるようになり、一連の戦争を通じて、前 146 年にはマケドニアとギリシアを、前 63 年にはシリアを、前 30 年にはエジプトを属州とし、ヘレニズム世界の西半分を概ねその領土としたのである。

ギリシアとローマについては、研究史上、その同質性が強調されてきた。伊藤貞夫が端的に指摘するように[13]、両者は、地中海性気候の風土の中、同じインド・ヨーロッパ語族に属し、自由と平等を旨とする市民共同体を都市国家において実現していたからである。しかし、

---

[11] 南雲泰輔『ローマ帝国の東西分裂』岩波書店、2016 年、175 頁。

[12] A. H. M. Jones, *The Later Roman Empire 284-602*, Oxford, 1964, p. 986.

[13] 伊藤貞夫「古典古代史を学ぶことの意義について」伊藤貞夫、本村凌二編『西洋古代史研究入門』東京大学出版会、1997 年、3-6 頁。

同じく伊藤が指摘するように、両者の差異も大きかった。例えば、アテナイでは貴族と平民の差異は消滅したが、ローマでは貴族政の色彩が強かったし、また市民権についても前者は閉鎖的であり、後者は開放的であった。貴族とその庇護民から成っていた初期のローマの社会のあり方は、ギリシアよりも、むしろカエサルの描くケルト人のそれに近い印象すらある。カエサルによれば、その支配者層である騎士たちは「武装奴隷や従者に取り巻かれて出陣[14]」してくるのであり、「一般庶民はほとんど奴隷と同然にみなされている[15]」とされているからである。ローマをヘレニズム世界外の存在と見ようとする筆者としては、ギリシアとローマの差異を改めて見直し、ローマ人の社会をケルト人、さらにはゲルマン人のそれとの同質性について検討してみたいと考えている。

ローマが支配することになったヘレニズム世界には、数多くのギリシア風の都市が存在していた。これらの都市は、評議会や民会を有し、名望家層によって運営されていた。彼ら名望家層は、ローマに積極的に協力することで、都市内での自らの地位の維持を図り、都市間競争での優位に立とうとしただけでなく、ローマ市民となって、帝国貴族層へと上昇していった。彼らがこのような態度をローマにとったのは、究極的にはローマの圧倒的な軍事力を恐れ、反抗するよりも、「共犯」関係に入ることを望んだからである[16]。藤井崇が紹介するように、『夢判断の書』の著者「アルテミドロスがほぼ唯一強調するローマ帝国の現実は、……ローマ当局による裁判と有罪となった場合の過酷な刑罰」であったが[17]、そのローマ当局の力の源こそは軍事力であり、実際の刑罰の執行自体が『新約聖書』のイエスの処刑に見られるように、ローマ軍の兵士に委ねられていたのである[18]。

在地の都市名望家層のこのような積極的な「共犯」にもかかわらず、ローマは、言語の面一つをとっても、ヘレニズム世界を統合することはできなかった。先に言及したように、東西の地域は、ギリシア語圏とラテン語圏に分かれたままで、その言語境界が東西帝国の政治的境界とほとんど重なりあっていたのである。ローマ帝国では、軍や行政で用いられる言葉は、東方でもラテン語であったが、ラテン語がギリシア語に代わって広く使われることはなかった。帝政後期になって、東方にも皇帝が常駐し、その政府に必要な人材が現地で幅広く求められたために、遅まきながらラテン語の習得熱が高まったが[19]、あくまでも上層民の社会的上昇のためのツールに過ぎず、ローマは、ヘレニズム世界をラテン語文化圏にする力は持たなかったのである。

---

[14] カエサル『ガリア戦記』第 6 巻 15。訳文は講談社学術文庫の國原吉之助氏のものに拠る。

[15] 同上、第 6 巻 13。

[16] C・ケリー『ローマ帝国』藤井崇訳、岩波書店、2010 年、52-76 頁。

[17] 藤井崇「ローマ帝国の支配とギリシア人の社会」『岩波講座世界歴史 3　ローマ帝国と西アジア』、岩波書店、2021 年、103 頁。

[18] 井上文則『軍と兵士のローマ帝国』岩波書店、2023 年、12-14 頁。

[19] 田中創「ローマ帝国時代の文化交流」『岩波講座世界歴史 3　ローマ帝国と西アジア』、岩波書店、2021 年、205-225 頁。

なお、西方では、ギリシア語は、マルクス・アウレリウス帝がこの言語で『自省録』を書いたことからも分かるように、2 世紀までは教養人の言葉として学ばれていたが、その習得の程度は 3 世紀以後、次第に低下していった。4 世紀の代表的な教養人であったローマの元老院議員シュンマクスですら、息子の教育に際して、ギリシア語を学び直さねばならなかったし、グラティアヌス帝の治世（在位 367～383 年）には、十分な能力を持ったギリシア語の教師を西方の諸属州で見出すことは既に困難になっていた[20]。

政治面での統合は、230 年代以後の異民族の侵入を機に大きく揺らぎ始める。ローマ帝国は、ユーフラテス川方面からは 224 年に興起したササン朝ペルシアの攻撃を受けるようになり、ドナウ川方面からはこれも新来のゴート人の侵攻を被り始めたが、これら異民族の侵入に迅速に対応するために、ウァレリアヌス帝（在位 253～260 年）は、帝国の東西分担統治を始め、自らは東方に赴いた。その後もカルス帝が帝国を東西で分治し、293 年にディオクレティアヌス帝の四帝分治制が始まって以後は、帝国の東西分治は、コンスタンティヌス帝、ユリアヌス帝、テオドシウス帝治世のごく一時期を除いて、4 世紀には全くの常態となったからである。東ローマの中心となるコンスタンティノープルも、同時期には次第に発展し、357 年にコンスタンティウス 2 世は、アカイア、マケドニア、全イリュリクムに居住する元老院議員の所属を、ローマの元老院からコンスタンティノープルの元老院へと移した[21]。これによって帝国の東西分治が永続的なものとされたのである。

こうして、395 年のいわゆるローマ帝国の東西分裂以前から、ローマ帝国の東部は独自の皇帝を頂いて、事実上西方から独立していくことになったが、3 世紀の危機の中で生まれたこの東の帝国は、同時期に生まれたササン朝の双子の国家であり、その関係も密接であったように思われる[22]。

いずれの国家も、一つの宗教を、すなわち一方はキリスト教、他方はゾロアスター教を積極的に支持し、皇帝は神の恩寵を受けた神聖な存在であり、また文明世界の支配者を自任した。両国の間では、皇帝の装束（王冠や赤い靴など）や宮廷儀礼（跪拝礼）、美術（シャープール 1 世の戦勝記念浮彫とガレリウス帝の凱旋門）、税制（ディオクレティアヌス帝のユガティオ・カピタティオ制とホスロー1 世の農業課税制度）などの面でも、類似していたことが指摘されている[23]。かつては、一方から他方への影響関係が想定されてきたが—例えば宮廷儀礼はローマへのペルシアの影響、税制は逆にローマからペルシアへの影響—、近年で

---

[20] Jones, *op. cit.*, pp. 986-988; 米田利浩「古代末期のギリシア文化」藤縄謙三編『ギリシア文化の遺産』南窓社、1993 年、109-114 頁。

[21] Jones, *op. cit*., pp. 132-133.

[22] 両国の関係の全体像については、米田治泰「ビザンツと西アジア文明」山田邦夫編『ペルシアと唐』平凡社、1971 年、336-431 頁。

[23] N. Garsoïan, Byzantium and the Sasanians, *The Cambridge History of Iran. Volume 3, The Seleucid, Parthian and Sasanid Periods, Part 1*, edited by E. Yarshater, Cambridge, 1983, pp. 568-592. 美術面については、M. P. Canepa, *The Two Eyes of the Earth, Art and Ritual Kingship between Rome and Sasanian Iran*, Berkeley and California, 2009. が詳しい。

は、その類似は共通するヘレニズム的基盤に由来するとの見方が有力である。しかし、両国間の人的交流が、外交使節の往来やキリスト教徒の移動、さらには戦時の住人の強制連行まで、様々なレベルで広く行われていたのも確かであり、相互の影響関係があったことは否定できないであろう。交易もまた盛んであり、両国間の条約交渉では必ずと言ってよいほど交易地の指定の問題が取り上げられた。この点は、6 世紀に入って以後、地中海の東西の交易が急激に衰退していたのとは対照的である[24]。経済的には、東ローマは、西ローマとではなく、ササン朝との関係が重要であったのである。

東ローマ帝国とササン朝の関係については、その類似性や深い関係性が見失われるほど、戦争を繰り返していたイメージが強いが、他方で、一定程度の信頼関係が醸成されていたことも忘れてはならない。両国は「人類にとって二つのランプのようなものであり、……目のように一方の輝きで、他方が明るくされている……[25]」のである。アルカディウス帝は、その死に際して、息子のテオドシウス 2 世の後見をササン朝のヤズデギルド 1 世に依頼したとされ（この話はプロコピオス『戦史』第 1 巻 2-7 が伝えているが、筆者には実に印象的で、この個所を読んだことが、東ローマとササン朝の歴史的位置について考えるきっかけになった）、逆にササン朝のカワード 1 世は息子のホスロー1 世をユスティヌス 1 世の養子にするように求めたとされている。この依頼は、皇帝の側近が反対したため実現しなかった。さらにホスロー2 世は、父親が殺害されたあと、東ローマに身を寄せ、マウリキオス帝の処置で帝位に就いたのである。ホスロー2 世は、マウキリオス帝の娘と結婚する予定もあったとされている。ただし、後にマウキリオス帝がフォーカスに倒されると、恩人の復讐を名目にホスロー2 世は、東ローマ帝国への最後の大戦争を引き起こすが、これは両国の密接な関係が裏目に出たのであった。

そうして最終的には、先に言及したように、ササン朝はイスラーム勢力により滅ぼされ、東ローマ帝国はエジプト、シリアなどを失うが、そのイスラーム帝国の領土は、かつてのヘレニズム世界の再現に他ならなかったのであり、他方で西ローマ帝国の地域は、イベリア半島を除いて、イスラーム勢力の征服を免れ、別の世界として留まり続けたのであった。

おわりに

ベルギーの中世史家 H・ピレンヌは、かつてその『ヨーロッパ世界の誕生—マホメットとシャルルマーニュ』において、ローマ帝国の地中海的性格とその一体性を強調し、これを破

---

[24] R. Hodges and D. Whitehouse, *Mohammed, Charlemagne and the Origins of Europe*, Ithaca, New York, 1983, pp. 20-53.

[25] この言葉は、298 年にガレリウス帝のもとに派遣されたササン朝使節が発したと、ペトロス・パトリキオスの断片 201 が伝えている。T. M. Banchich, *The Lost History of Peter the Patrician, An Account of Rome's Imperial Past from the Age of Justinian*, London and New York, 2015, pp. 133-135; B. Dignas and E. Winter, *Rome and Persia in Late Antiquity: Neighbours and Rivals*, Cambridge, 2007, pp. 122-124.

壊したのがイスラーム勢力であり、その破壊の中から西ヨーロッパ世界が誕生したと論じた[26]。しかし、本試論では、地中海世界の一体性に疑問を呈し、ローマは、本来は別の歴史的世界であった西ローマ地域と東ローマ・ヘレニズム地域を一時的に統合していたにすぎないとみなした。また、同じヘレニズム世界を基盤として、3 世紀に誕生した東ローマとササン朝との関係を重視する立場を示した。このことは、同時に西ローマと東ローマの差異を強調することにも繋がるが、この点については今回、十分に言及することはできなかった。西ローマと東ローマの差異については、西ローマの衰退論との関係で、権力構造の違いなどに注意が払われてきたが[27]、より根本的な意味でのそれとして再検討してみることが必要であろう。

（早稲田大学教授）

[26] H・ピレンヌ『ヨーロッパ世界の誕生―マホメットとシャルルマーニュ』増田四郎監修、中村宏、佐々木克己訳、講談社、2020 年。原著は、1937 年刊。

[27] 例えば、M.T.W. Arnheim, *The Senatorial Aristocracy in the Later Roman Empire*, Oxford, 1972.